

二〇二一年二月二六日

雛あられ膝にこぼして老託つ
行者径奈落となりて初音聴く
東風吹くや舳先にしづく波頭
耳慣れし神話セミナー春眠し
土の香に混じる草の香春田打つ
おむすびの転げて土手の草青む
雲影の風雲急や春一番
碁盤の目走る市バスや京の春
春風邪と侮るなけれ厨事
命綱外し屋根替え昼休み
春愁や白髪を染める共鏡

二〇二一年二月二五日

春愁の頬杖をつく文机
住古りし団地に迷ふ春の宵
小食の子もおかわりす雛の寿
春暁の湖展けたる橋の上
春雨の水輪せわしき池の面
石庭の砂紋に散りぬ濃紅梅
碧天にうぶ毛ふるへる辛夷の芽
一礼しバスを降りたる卒業子
威儀ただし合掌ながき遍路かな
絡みあふこの飯蛸の足はどれ

二〇二一年二月二四日

朝取りの水菜は筈に反りかへる
句敵ら並びて祈る梅の宮
百選の鐘撞き鳴らす四温晴
野仏の大きな耳に初音かな
放水のダム湖を囲む芽吹き山
梅匂ふ石垣高き屋敷町
待ち合わせ場所は団子屋初大
雨晴れて菜の花の黄のいやしぬ
合唱は旅立ちの歌草萌ゆる

二〇二一年二月二三日

梅にほふ海一望の四阿に
駅ひとつ歩かふべしや春の宵
げんこつのやうな瘤より木の芽出づ
寒禽の鋭声を仰ぐ夜勤明け

きづな

よしな

わかば

明日香

うつつ

菜々

とろう

つくし

百合

なつき

よう子

うつき

有香

なつき

百姓

とろう

ひかり

満天

かれん

よう子

菜々

百合

きづな

かれん

よし子

小袖

菜々

なつき

ぼんこ

とろう

菜々

こすも

せいじ

なつき

二〇二一年二月二二日

住職の手遊びという牡丹の芽
春兆すゴルフの予定目白押し
はしゃぐ子の声降ってきし梅の谷
ウクレレに歌ふ仲間や春うらら
流刑地の深き谷へと雪崩けり
一片の雲なきみ空揚ひばり
巫女鈴芽吹く木々へと振りこぼす
眉のごと稜線みせて春の山
図書館へ通ふ道ゆき梅盛る
鳥達の案内に巡る梅の苑
三重の塔立つ神社山笑ふ
陽だまりの石に鳥来る雪解川
爺のそば犬も寝転び山笑ふ

二〇二一年二月二二日

一幅は一筆富士や雛の宿
芽柳の下に人待つ夕べかな
雪解けの水坂道に逸りけり
宝物探しに似たり路のたうす
水音に満ちて里山春兆す
春野ゆく園児らの列疎に蜜に
付添ひの試歩の小徑に草萌ゆる
踏青の弾みごころに水際まで
旅人の足裏見せ合ふ囲炉裏かな
天領でありし能勢の田雉子走る
石像の胸彫られをる春日影

二〇二一年二月二〇日

古民家のミニコンサート鑑飾る
診療所村人総出雪下ろす
料峭や一遍像の前かがみ
掴めよと差伸べる手の温かし
踏青の妻はピンクのスニーカー
立春の日を弾きをる川面かな
振るまひの甘酒熱し厄落とし
留守番の夫へ草餅家苞に
野火煙り右往左往す日和かな

二〇二一年八月二日

毎日句会みのる選・二〇二一年八月二日

雅う流

宏虎

美咲

なつき

はく子

菜々

きづな

せいじ

あさこ

菜々

なつき

よし女

三刀

きづな

こすも

明日香

とろう

すずか

わかば

はく子

なつき

雅流

治男

わかば

なつき

とろう

なつき

百合

せいじ

百姓

菜々

ぼんこ

英子